

「駐韓美軍史」

大西 裕

1. 出版事情

本書は、アメリカ国立公文書館 (National Archives and Records Administration, NARA) がオリジナルを所蔵する *History of the United States Armed Forces in Korea* のマイクロフィルムを、韓国のトルペゲ社が編集・プリントしたものである。原書は、アメリカ陸軍の著となっている。原書が編纂された場所、日時は正確には判明しないが、所収文書の期日から推測すると、朝鮮半島におけるアメリカ軍の軍政が終了した、1948年の後半に行われたものと推測される。文書の作成先は、米軍極東最高司令部となっている。なお、本書を編纂するにあたって、アメリカの議会図書館 (The Library of Congress) が1978年にマイクロフィルムに制作したものを復刻しているので、議会図書館がマイクロフィルムを制作する過程で除外された章は、本書にも収録されていない。したがって、NARAが所蔵する原書を全て収めているわけではなく、マイクロフィルム化がなされていない、ないしは原書が未完成であるなどの理由により、分野によって欠落がみられる。

本書は3巻構成で、うち第3巻は2分冊で、第1巻669ページ、第2巻649ページ、第3巻第1分冊688ページ、第3巻第2分冊675ページ、総ページ数2681ページに及ぶものである。編集者はイム・スンナムである。なお、本解題を執筆するに当たって、筆者は浜口裕子氏 (文化女子大学) 所有のものを参考にさせていただいた。

2. 資料作成の経緯

本書は、韓国の研究状況をにらみながら作成されたものである。日本でも同様であるが、韓国でも、第2次世界大戦終了前後史の研究、いわゆる解放前後史研究は、多くの関心を引きながらも資料の不足からなかなか進展を見せなかった。そこで、多少でも資料の不足を克服できるようにと、1986年に「韓国現代史資料叢書」(全15巻) という国内資料を収めたものが編纂された。

このように国内資料の使用はその利便が図られるようになってきたが、これだけでは不十分で、解放直後の朝鮮半島を見通すためには、米軍政の実態を明確に眺望できる資料が不可欠である。朝鮮における米軍政の実態を紹介する資料としては、「アメリカの対外政策」や「米軍政情報報告書」が研究資料として提出されていたが、前者は外交文書に限定されており、後者はレポートの水準を出るものではなく、アメリカの朝鮮半島占領政策を一目瞭然に把握できる類

のものではなかった。このような事情から、米軍政の全体を把握可能であり、しかも韓国国内ではアクセスが極めて困難な資料を韓国国内でも入手可能とすることが必要と考えられ、その一つとして1988年に本書の編纂がなされた。このため、本書は、一般読者だけではなく、研究者をも対象としている。

3. 内 容

一般にHUSAFIKと呼ばれる「駐韓美軍史」は、米軍政が行われた1946～48年の間にアメリカ外で編纂された、未公開の軍史2編中の一つで¹⁾、当時のアメリカの占領政策を、米軍政の視角から、総体的かつ包括的に眺望できる貴重な資料である。ダブルスペース、英語タイプ打ち原稿で2000ページを越える、膨大な分量の「駐韓美軍史」の主たる部分は、アメリカ軍情報担当部署(G2)の首席軍史官であるラーソン(Harold Larson)博士が責任編集し、G2に所属する軍史室(Historical Division)のスタッフが分担執筆した。なお、責任編集者であるラーソン本人は途中で軍史室をやめて、その編纂を後任のビーラー(Dr. Lewis W. Bealer)にゆだねている。ちなみに、ラーソンの経歴は現在のところ筆者には明らかにできない。

「駐韓美軍史」は、全体が3部からなる未完成原稿であるが、政治だけでなく、軍事、行政、警察、司法、農業、経済、教育についてそれぞれ分野別に作成されたようである。なお、原書の構成のうち、一部は軍史室以外の執筆となっている。たとえば、第1部の第8章「日本の民間人と他の外国人の本国送還」は、第1情報歴史サービス部のミントン(Minton)中尉が最初に調査・報告したものを、若干の情報を補った上でラーソン本人がそのアウトラインを作成して、半ばを書き上げ、残りを彼の後任が完成させている。第3部第6章の「南朝鮮の農業」は、極東軍総司令部において編集されたものだが、ソウルの第24軍団G2の軍史室のウォール女史(Miss Frances Juanita Wahl)の監督の下で1947年に書かれて、東京の総司令部に送られたものである。ただし、途中で軍史室の室長がラーソンからビーラーに代わったためもあり、第3部の第1分冊が編集された時点では著者不明となっていたようである。これら以外の文書については、誰が最終的に原稿を書いたのかは、本書だけからでは明らかにできない。

本書は3部構成である。第1部は、軍政ではなく軍事作戦の執行状況について記述がなされている。第1部の構成は、時間順になっており、まず、米軍が朝鮮半島に進駐する過程(第1章)を述べ、続いて米軍進駐以前の、日本支配下および米軍進駐直前に噴出した韓国民衆の政治参加(第2章、第3章)が記述され、以降、米軍が、朝鮮半島進駐後日本軍の降伏を受理して中央、地方の占領を開始する過程(第4章、第6章)が述べられる。これらの軍事的占領の過程の合間に置かれているのが、軍事的占領に伴う人の移動についてで、第5章で連合国戦争捕虜の釈放、第7章で日本軍の武装解除と本国送還、第8章で日本民間人と他の外国人の本国送還が述べられている。なお、第9章韓国人の本国送還、第10章軍政、第11章軍事作戦司令部は、未完成のため収められていない。

第2部は、米軍が進駐してから1948年に韓国が独立するまでの政治についてで、第1章から第3章までが韓国国内政治、第4章と第5章が朝鮮半島をめぐる米ソ交渉となっている。記述されている期間は、米軍進駐後から大韓民国の独立までであるが、国内政治については47年ま

で、米ソ関係については46年7月までは完成しているが(第1章, 第2章, 第4章), それ以降については整理が不備で、米議会図書館もマイクロフィルムを作成していないため収録されていない(第3章, 第5章)。

第3部は、行政機構と政策への軍政庁の関りについてである。ここでは、まずはじめに軍政機構(第1章), 中央政府(第2章), 地方政府(第3章), 警察(第4章), 司法(第5章)とそれぞれの組織形成を個別に記述し、その後、農業(第6章), 産業(第7章), 財政(第8章), 教育(第9章), 保健衛生(第10章), 交通(第11章), 通信(第12章), 独立部署(第13章), 国防(第14章)と、政策ごとに軍政庁の関りがそれぞれ記述されている。なお、第3部は2分冊となっており、第1分冊は第5章までを、第2分冊はそれ以降を扱っている。ただし、第7章, 第8章, 第10章, 第11章, 第12章, 第13章, 第14章は、原稿そのものは完成するも、マイクロフィルムが作成されていないため、本書には収録されていない。

次に、本書の目次を掲げる。

第1部

第1章 使節と対象への動き

ブラックリスト/第24軍団/使節/情報組織/利用可能な軍隊/海運/作戦計画/供給と管理/
日本人との接触/韓国との関係/乗船

第2章 日本降伏前の韓国

韓国史の背景/韓国をめぐる闘争/「内鮮一体」/韓国人の抵抗/南体制/日本の支配の程度/
土地所有/教育/海外の韓国人/朝鮮内での外国人の活動

第3章 間奏曲：1945年8月

天皇の降伏声明/韓国人の最初の自由の味/日本人財産の差し押さえ/ロシアの恐怖/日本
の維持統制/政治結社の形成

第4章 日本の降伏と占領の開始

先遣隊/アメリカの上陸と仁川の占領/第7師団のソウル占領/南朝鮮の正式降伏/
“Baker-Forty”の完成/政権奪取/米軍への不動産の徴用/仁川港の占領/言語問題/
「危険物」

第5章 連合軍捕虜の釈放

復興チームの形成, 派遣, 到着/キャンプへの移動/キャンプの条件と囚人/囚人のタイプ/
囚人の排除/囚人に対する日本の扱い/仁川キャンプ/ソウルキャンプ/湖南(Konan) キャン
プ/Air Drops/戦争犯罪人の逮捕/市民の被抑留者/記録と埋葬

第6章 道(注：地方行政単位)の占領

第40師団/Panayからの引揚げ/釜山地区/釜山か仁川か(?) /第40師団東南朝鮮占領/ア
メリカ管轄地区の北方部の占領/空白を埋める/第3段階/第6師団/第6師団の計画/仁
川への引揚げ/第6師団の軍団への参加/戦術部隊による軍事支配/第40師団の撤退/エピ
ローグ

第7章 非軍事化と日本軍の撤退

朝鮮における日本の戦時秩序/日本軍に対するアメリカの政策/日米両軍間の連絡機構の確立/ソウルにおける日本の連絡部隊の活動/釈放された兵士の撤退/日本軍を含む無秩序/日本軍の連絡機構の退避/ソウル連絡部隊に報告されたスパイ情報/第17方面軍の基金調査/ソウル連絡部隊の人事/第17方面軍により設置された他の連絡部隊/米軍により設置された連絡部隊/中心部における日本軍の武装解除と除去/済州島守備隊の降伏と武装解除/日本の部隊の動きと活動/処理と撤退/朝鮮の日本軍におけるスパイ情報の収集/日本の軍事施設の廃棄

第8章 日本民間人と他の外国人の本国送還

問題/ソ連占領地区における日本民間人/含まれる機関/優先順位と手続き/日本人の役割/移動の様相/釜山における日本人の除去/他の韓国の港の利用/1946年における更なる展開/SCAP本国送還会議/北からの亡命者/コレラの流行の影響/北からの亡命者の扱い/継続する北からの日本人の流れ/他の外国人の本国送還/不法渡航/最終段階

第9章 韓国人の本国送還（未完成）

第10章 軍政（未完成）

第11章 軍事作戦司令部（未完成）

第2部

第1章 韓国の政治と人民：最初の6カ月間

人民共和国/共産党/国民党/代表民主議院/政党の登録/韓国のリーダー/諜報部門/韓国の報道機関との関係/毎日新報の場合/金九の到着/兵士と韓国人

第2章 韓国の政治と人民：最初の年

韓国における右翼と左翼/左翼が権力を求める/統合を求める右翼の動き/民主議院/アメリカの政策変化/社会民主党/左右合作委員会/シン・イクヒの陰謀/小括

第3章 韓国の政治と人民：第2年目

第4章 米ソ関係：第1年目

38度線/以前の指示/連絡機構の樹立/ソビエト領事/38度線沿いに/韓国における権力政治/モスクワ会談と韓国/経済交渉/米ソ会議/米ソ合同委員会/38度線上の問題/さらなる経済交渉/連絡機構の維持/アメリカ人、ロシア人と朝鮮の共産主義者

第5章 米ソ関係：第2年目

第3部第1分冊

第1章 軍政機関の創出

軍事的必要性対軍政

第2章 民族行政機構の設立

韓国における日本の行政/道の行政/韓国経済の政府統制/韓国の公共施設の政府統制/出版と教育の政府統制/行政に対する第24軍団の計画/第24軍団の政権奪取/民族政府の構造/行政幹部/計画部門/総務部門/韓国人の市民サービス部門/外交部門/財産保護部門/経理部門/道行政部門/広報部門/国防理事会/局と機関/軍事行政/結論

第3章 道および地方政府

京畿道/江原道/忠清南道/忠清北道/全羅南道/全羅北道/慶尚南道/慶尚北道

第4章 警察と公安

第1節 韓国における警察組織

韓国における日本の警察/アメリカの奪取/初期の困難/初期の組織/軍事警察からの分離/再編/防火/通信局/捜査局/公安局/総務局/道における政策変化/道における警察の樹立/道における初期の困難/警備隊, 沿岸警備隊, 消防との関係/鉄道警察/国家的事件における警察の位置 (1946年)

第2節 1946年10月の擬似反乱

騒乱指導者に対する刑罰/動乱の背景/軍隊の責任

第3節 警察と国家的事件, 1947-1948年

「三一」反乱-1947年/1947年8月反乱/警察と警備隊の対立関係/境界事件/米供出と警察/通貨偽造/1948年2月反乱/済州島の無秩序/済州島反乱の原因と影響/選挙と警察/チャフ博士, 警察へ/青年団/国連朝鮮臨時委員会(UNTCOK)に対する左翼の不満/国連朝鮮臨時委員会の調査/投票日/混乱/半島部の道/済州島/選挙のマネ氏/郷報団/8月新政府の祝賀/予防拘束/混乱の拡大/北朝鮮の「選挙」/終結/移動の問題/アメリカの人事局の役割/警察の野蛮性/警務部内の軋轢/アメリカ人事局の骨格の延長/条件の変化

第5章 司法行政

法と秩序の樹立維持のための占領計画/朝鮮総督府の崩壊/法と秩序の樹立/降伏前の日本統治下の司法制度/米軍事占領下の法の強制/統制と権威の日本からアメリカへの移行/法務部の韓国化への再編成/軍政の再編成-南朝鮮過渡政府(SKIG)の樹立/裁判所/財産の移転と苦情/刑務所等/司法制度の再編成-裁判所の行政部からの独立

第3部第2分冊

第6章 農業

- (1) 背景 (序/日本の支配/アメリカの占領/軍政の準備)
- (2) 生産 (A. 食用農産物[1. 米, 小麦, 大麦, その他の穀物, 2. 果物, 野菜等, 3. 家畜類, 4. 水産物]/B. 工業用農産物[1. 養蚕, 2. 綿花, 繊維等工業用農産物, 3. 森林地])
- (3) 実験, 教育, 農学的知識の普及 (A. 実験基地/B. 農業教育/C. 農学的知識の普及 [1. 農民週報, 2. 朝鮮農業協会, 3. 新朝鮮会社, 4. 中央農事普及サービスの提案])
- (4) 土地 (A. 灌漑と開拓/B. 小作と小作料/C. 肥料)
- (5) 結論 (A. 北朝鮮の農業/B. 南朝鮮の農業の特徴/C. 障害/D. 要約と結論)

第7章 商業 (未刊行)

第8章 金融 (未刊行)

第9章 教育

前書き

- (1) 序
- (2) 1945年以前の韓国の教育

朝鮮王朝下での教育/1911年の日本の指令/併合期の一般的特徴/1922年の指令

(3) アメリカ占領の始まり

準備段階/教育の再編/学校における部隊の宿舎の提供/教科書の状況/教科書出版の問題/教科書の配布/新しい教科書の準備/編修局の業績

(4) 初等, 中等, 普通学校の進歩

初等学校の進歩/中等学校/普通学校の再編と進歩

(5) 職業学校の業績

職業学校一般/家政教育/商業教育/技術教育院

(6) 高等教育

高等学校の再編/「大学校」計画/高等教育の問題/文教部の再編, 1947年/財政問題/教養に関する報告, 1947年8月/ソウル国立大学

(7) 特殊高等教育

準医学教育/看護教育/獣医の訓練/心理学の教育

(8) 教員組織

(9) 在外韩国人の教育

アメリカにおける韩国人学生/奨励金に対する問題/アーント使節報告

(10) アメリカ言語教育機関

韓国教育委員会の推薦/アメリカ言語教育機関の発達/1947年中頃までの進歩/ラジオによる英語教育

(11) 学生のストライキとその他の紛争

一般的な傾向の背景/中等学校と大学でのストライキ/ソウル国立大学でのストライキ/大学のストライキの要因/韓国の世論と大学のストライキ/1947年のメーデー/メーデーの扇動者と警察/国と市の部局の諮問者間の軋轢/軍政庁の調査

(12) 大韓民国への移行

第10章 公衆衛生と福祉 (未刊行)

第11章 運輸 (未刊行)

第12章 通信 (未刊行)

第13章 独立機関 (未刊行)

第14章 民族軍 (未刊行)

4. 文書の特徴

この文書の特徴の第1は, 各章の独立性が極めて高いことである。章によって, 序章や前書きの有無, 章の構成のしかたが異なる。特に, 第3部にその傾向が強く, 第3部全体の目次以外に, 各章ごとに目次が存在しており, 責任編集者が途中で交替したためか, 編集方針を完全には統一できなかったことを示しているようである。

第2に, この文書は, 編纂されたものであり, 一次資料ではないとはいえ, 詳細な脚注から, 今日では利用することが困難な米軍政庁 (USAMGIK) の指令や入手困難な文書をふんだんに利

用していることが分かる。このことから、一次資料に準じた扱いが期待できる。

第3に、本書は行政文書の集合体等とは異なり、歴史家の手により編纂されていることから、文章そのものは筋があって読みやすい。このことはそれだけ情報の加工がなされていることを意味しており、資料の扱いに慎重であらねばならないが、米軍政庁が当時から評判の悪かった朝鮮半島の占領行政をどう考えていたのかを垣間見ることも可能と思われる。

本書は、編纂に当たって、アメリカ議会図書館で1978年にマイクロフィルムに撮影されたものを使用している。したがって、マイクロフィルムを制作する過程で除外された章は、この本にも収録されていない。分野別には、金融、商業、産業等重要分野が欠落しており、軍政庁の政策分析に使用するには十分な資料とはいえないであろう。また、使用した資料の原文は、NARAに所蔵されているが、資料が作成されてからすでに40年以上経っているため、原文書には多くの損傷がみられ、マイクロフィルムでもそこがはっきりせず、600ページあまりは判読できなかったとされている。本書では、一部は出版社の方でタイプ打ちがしなおしてあり、読みやすくなっているが、写真版による複製部分にはかなり読みにくい個所がある。

5. 資料の使用方法

本書は書名が示すように、米軍の南朝鮮における軍政史である。このため、当時の軍政の政策過程を追うことはできるが、経済史的な関心を満足させることはできない。たとえば、第3部第2分冊第6章では、農業が取り上げられてはいるが、農産物や農業の形態といった農業の特徴そのものというよりも、むしろ農業に対する軍政庁の政策に重点が置かれている。したがって、ここから農業生産に関する米軍政期における詳細なデータ等は期待できず、むしろ、日本支配下での農業組織が米軍政によりどう変わったのか、あるいは米供出等の事件の際の米軍政庁と南朝鮮過渡政府、農民の交渉過程といった政治過程が米軍の視点で明らかにされるのである。

同分冊第9章についても同様のことがいえる。本章の対象は、朝鮮における識字率等の教育の程度ではなく、教育行政に関することが中心となっている。南朝鮮での教育の再編に対し、軍政庁がいかに取り組んだかが中心となっている。このなかで、日本式の教育とは一線を画す教科書の準備やソウル国立大学等の高等教育に対し積極的に取り組んだ姿勢が書かれているが、一方で学生の騒乱への対処も書かれていて興味深い。しかしながら、教育の実態を表す数値的資料はほとんど期待できない。

本書では、第1部で日本人の引揚げや韓国人の帰国についての記述が詳細にみられる。これらの事象については、日本の敗戦に伴う朝鮮半島の混乱があって、現状の把握が極めて困難であるが、本書は、これを米軍政の立場や方針という観点から理解する視点を与えてくれる。本書単独ではその理解はなお不十分であろうが、これと、森田芳夫の著作⁽²⁾と照らし合わせることで、玄海灘を渡る人々の記録をある程度客観的につかむことが可能となろう。

6. 資料自体に関する評価

本書を使った本格的な分析としては、B・カミングス (Bruce Cumings) の『朝鮮戦争の起源』⁽³⁾

等が出てきており、一部でその本格的な使用がはじまっている。本書は、軍政庁と現地政府、現地住民および日本軍との交渉を軍政庁の観点から記述したものであり、朝鮮半島における米軍政期の研究にとって必須の参照文献であるといつてよい。NARAにオリジナルが、また米国議会図書館にマイクロフィルムが所蔵されていたために、これまでアメリカ人以外の研究者には利用しにくい面があったが、本書の公刊によりより利用しやすくなったといえよう。

現在、韓国では解放前後史の研究が急速に進みつつあり、たとえば済州島反乱に関する当時地元で刊行されていた『済州島新聞』の発掘に示されるように、中央のみならず地方における政治経済の状況の把握につながる資料の発掘が急ピッチでなされている。その状況を踏まえると、「駐韓美軍史」は内容的に必ずしも新しいものではなく、その叙述は現在の解放前後史研究の水準を満たすものとはいえないであろう。加えて、本書は、金融、商業、産業等の重要な箇所が抜けているなど、当時の南朝鮮の政治経済の状況をくまなく知ることができるとはいいがたいと考えられる。

しかしながら、現在の解放前後史研究は、方向性として民衆側に立った資料発掘が進められているが、政治が統治する側と統治される側の交渉で成り立っている以上、統治する側であった米軍政の資料が不要になることがあり得るわけがない。その米軍政の動向を知る上で、本書は第一級の資料であり、米軍政庁がいかなる政策で南朝鮮を統治しようとしていたのかが分かる、解放前後史を研究する上での必須資料であることには変わりがない。

加えて、本書は、今日解放前後史研究で主流となりつつあるカミングスの仮説の検証にも不可欠である。カミングスは、『朝鮮戦争の起源』において、本書の原著となるHUSAFIKを駆使して研究活動を行い、米軍政が当時の韓国民衆が作り出した自主的自治機関を潰していった過程を描いているが、彼が利用している資料へのアクセスが困難なため、彼の仮説の検証はこれまではなはだ困難であった。「駐韓美軍史」は、彼の著作の中でも中核を占める資料なのであるが、その入手は容易ではなかったのである。本書は、部分的ながらも検証の難しさを緩和するもので、カミングス仮説の批判・検証もこれをもって本格的に可能となろう。

〔注〕

- (1) もう一つは、*History of the United States Army Military Government in Korea*である。
- (2) 森田芳夫『朝鮮終戦の記録——米ソ両軍の進駐と日本人の引揚』巖南堂書店、1964年。
- (3) Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War: Liberation and the Emergence of Separate Regimes 1945-1947*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1981.